



映画とアコと音楽と ④ そのⅡ

前回予告をした残り 2 つの紹介です（前号の表題に④が抜けていました、お詫びいたします）

『他人の顔』（1966 年日本。阿部公房原作・脚本 勅使河原宏監督）

主人公（仲代達也）は工作中的の事故で顔に大火傷を負って必要にせまられ仮面を着けるのだが、元の自分の顔が消失した事で別の人生・人格を得たようになり、他人になりすまし妻（京マチコ）を誘惑する実験をする。主人公をそそのかす精神科医（平幹二郎）、看護婦（岸田今日子）、ビヤホールの歌手（前田美波里）など名優揃いだ。

撮影場所は私は行った事は無いのだが、新橋のミュンヘンというビヤホールのようだ。製作者の遊び心で原作者の安倍公房と劇中歌を作曲した武満徹が紛れ込んでいて、大勢で賑わう店内で後ろ暗い会話をする主人公と精神科医がふと動いた拍子に、背後の酔客の中にチラリと映るのが面白い。

ビヤホールの歌手が生バンドの前でドイツ語で歌う「ワルツ」がとてもカッコいいからキャリコ（私が伴奏役のシャンソンのデュオ）で弾いてみたらとMさんから教えて頂き本作を知った。生バンドの中にアコーディオンの奏者が 2 人。歌手も無表情、アコ奏者二人も似たような風貌で黒のとっくりセーターで無表情。仮面の暗喩だろうか。映像は実験的なモダニズムが漂うモノトーン。60 年代の香り。ドイツ語の暗いワルツ。退廃、虚無、悪徳、虚飾という言葉が浮かんでくる。

（後日談。歌担当の Rさんは声楽の先生からドイツ語の発音を習った。半年以上かかり武満ワルツはキャリコのレパートリーになった）

『フリークスも人間も』（1998 年露。アレクセイ・バラバーノフ監督）

20 世紀初頭のロシア・サンクトペテルブルクが舞台。白夜のサンクトペテルブルグで撮影した映像はセピア調色で現代のロシアで撮影したとは思えない。

2014 年にサンクトペテルブルグへ旅行したが旧市街はせいぜい高くて 3 階建て程の 19 世紀の建物が河沿いに立ち並び、古い油絵の中へタイムスリップしたような街並みだった。タイトルにフリークスとあるが謎の男を指しているようだ。

あらすじはヨハンという謎の男の出現により 2 つの平穏なブルジョワ家庭を精神崩壊から実際の崩壊に導く。ストーリーは暗い上、背徳とフェティズムに満ちているのでここで詳しく解説はできない。

レンタルであるとすればカルト映画コーナーだろう。38 歳でこの作品を創った監督は 2014 年に 54 歳で亡くなっている。独自の世界観の濃さに驚く。隅々に行き渡るレトロな映像美。医者（の養子）のシャム双生児もヨハンの毒牙にかかり見世物にされるのだがそこに日本の見世物小屋のような淫靡さは無い。観客はキチンとした身なりで、双生児の奏でる 1 台のアコーディオンと美しいボーイソプラノ・デュオのロシア歌曲に夢中でホールは大盛況なのだ。これも「歌とアコーディオン伴奏」のシーンだ。（④ 完）

《和里田 えり子》

♪「JAPC アコーディオン夏祭り 2018」 ぶらり訪問記 ♪

2018 年 7 月 15 日（日）開演 11：00（終演 16：30） 会場：日暮里サニーホール

主催：JAPC 日本アコーディオン振興協議会

協力：ローランド(株)、(株)谷口楽器、(株)イケベ楽器店 鍵盤堂、(株)モリダイラ楽器、
JAA、(株)トンボ楽器製作所

JAPC 代表小川正浩氏あいさつより・・・参加者の皆さん、日本各地だけでなく台湾からも来ていただき本当にありがとうございます。JAPC といいますのは「楽しくアコーディオンの魅力を伝えたい」というのが趣旨でございますので、正にこういうイベントでアコーディオンの魅力を理解していただければと思いますのでよろしく願いいたします。本日は 33 組プラスゲストの演奏です。会場も大きいホールを取り新しい試みをしていますので最後までごゆっくりお楽しみください。

司会より・・・本日は四部構成でお届けするスタイルになっております。休憩が 3 回ございますが 1 回目の休憩は約 1 時間お取りさせていただきます。お昼ご飯休憩を予定しております。午前 11 時から午後 4 時半ごろまで続くコンサートなのでお昼ご飯を召し上がられて最後のゲスト演奏まで楽しんでいただけたらと思っております。

今回で 8 回目となった JAPC 夏祭りを聴きに来るのは初めてではありませんが、前回までは 100 名入るとぎちぎちの会場だったのでステージも限られて、出場者募集でもソロ、または二人までの重奏、アンサンブルという条件でした。昨年終了した時点で早々に次回はコンサートサロンでは狭いのでサニーホールを予約しましたと報告されました。

今年のホールにはしっかりしたステージがあり 20 名以上の合奏でも大丈夫なので、今後は演奏者募集の条件の幅も広がるのではないかと思いますので、ますます夏祭りが楽し

みになります。

さて、最初の演奏者は、アコーディオンを始めて 2 年だそうです、この楽器が私を育ててくれた感じがしていますと司会のコメントにあった若い女性の方で「STYLE MUSETTE」を演奏されました。

2 番目の演奏は、習い始めて 10 年の九州福岡から参加された女性の方で「リベルタンゴ」を演奏されました。習い始めたころからずっと演奏したいと思っていた曲とのことでした。

3 番目の方は、2 回目の出場です。アコーディオンは 6 2 歳から始め、10 年になるという 7 2 歳の男性の方で「パリの空の下」を演奏。

4 番目の方は、お父さんがインド人の中学生の女の子です。アコーディオンを始めて 3 年になりこの夏祭りには 3 回目の参加で毎年楽しみにしているそうです。練習の方法が変わっていて、福岡県の先生とテレビ電話でレッスンをされていると紹介されていました。バッハの曲を 2 曲演奏され、はじめに「主よ、人の望みの喜びよ BWV (作品番号) 147」そして、「Variationen」です。

5 番目の方は子どものころに観た映画がきっかけでアコーディオンを始められたという男性でちょっと変わった曲を演奏されました。「Masquerade」(マスカレード) スマホなどで楽しめる音楽ゲームの中の楽曲だそうです。

6 番目は、愛媛県から参加の女性の方で、子育てが一段落して毎日アコーディオンに触れることが一番の楽しみと紹介されました。演奏曲は「A French Touch」(フレンチ・タッチ) です

7 番目は二重奏、グループ名「Jucgiocy」とは「熟女女子」熟女のお二人ということだそうです。曲は「Dizzy Fingers」。

8 番目は9歳の男の子です。僕にとっては難しい曲けれどもお客様に聴いてもらえるのが嬉しいとコメントがあり「Czardas」（チャルダッシュ）の演奏でした。堂々とした演奏に客席もびっくりです。

9 番目は今年83歳になられる台湾から来られた方です。コメントで、「私はパーキンソン病ですがアコーディオンを弾くことで元氣になれます」とおっしゃっていました。曲は「You Raise me up」です。

10 番目は福岡から参加の方で、去年この夏祭りの懇親会に参加されてとても楽しくて、まだ1年半だけれどもどっぷりアコーディオンの魅力にはまっています。曲は「マルゴのワルツ」

11 番目は、3回目の参加の方で曲は「Jolly Caballero」動画で聴いて軽快な曲調が気に入って練習されたとのこと。

12 番目は75歳になる女性の方で、うたが大好きな人たちの「歌声サロンなど」の中でアコーディオンを弾き喜びを分かち合っているとおっしゃっていました。曲は「チャイコフスキー組曲四季より「10月 秋の歌」

13 番目は、アコーディオンは学生時代から趣味として楽しんできて、最近ではボーカルの方とデュオでボランティア活動をされているという方です。曲は「軍艦行進曲」

14 番目は、第一部の最後の方たちで、第一部での二つ目の二重奏です。2015年に結成されたユニットで、Memery（メモリー）から最近改名され、「アコーディオンデュオ巡～Meguree～」での演奏です。曲は「Esqualo（鮫）」

・・・・・・昼食休憩・・・・・・

第一部を紹介してきましたが、第二部も第三部も同様に司会原稿でエピソードなどを交えて出場者の想いを紹介しながら進みま

す。

第二部のトップは台湾から来られた「台北手風琴楽団」の皆さん11名による合奏です。3曲演奏しました。

1 曲目は「何日君再来」（いつの日君帰る）

2 曲目は四月望雨（四季紅、月夜愁、望春風、雨夜花）

3 曲目は夜來香



第二部は他に、ソロで「Spain」や「過ぎ去りし永遠の日々」「Dark Eyes」など6組が演奏。二重奏で「パリのお嬢さん」「情熱大陸」の2団体が演奏。

第三部の始まりは Luann「るあん」の皆さんがホール後部ドアから入場し演奏しながら会場を1周りするサプライズで始まり、舞台での演奏は「La Noyee」。

第三部のソロは横浜のライブハウスで演奏されていると紹介された方で始まり、曲は「レッツサーカスの思い出」と「Time to Say Goodbye」の2曲を演奏。

福岡から飛行機で午前中に到着されたと紹介された方は、アコーディオンを始めて1年半、練習は苦戦しているけれどもノリノリ弾けるように頑張ると演奏したのは「アックアレリ・クバーニ」。また、ロシアの人が弾いている素敵な曲を見つけたので皆さんにも知ってもらいたいと参加した方は「Cabman」「（タクシー運転手）」という曲なので赤と緑の靴下に黄色いシャツで登場」と紹介。信号の色をイメージしたとかで、車のハンドルを握っているイメージがよく出ていました。時々クラクションのような音が聞

こえます。ベローシェイクも効果的で楽しい曲です。

独奏では他に「Tango pour Claude」、また、今日は「夏まつり」というタイトルだったのでと浴衣姿で登場 V アコーディオンで「人生のメリーゴーランド」を演奏された方。

蛇腹のスムーズな切り返し、左右の音のバランス、ベースの音が途切れないよう、本当に難しかったと「夢のあとに」そして「別れの曲」の2曲演奏された方。

第三部での二重奏は1団体で、「SAMSARA」(サンサーラ)をピアノと演奏。最後は台湾の方のソロで、自作曲「電車叮噠 叮噠」を演奏されました。

出場者を見ると、比較的経験の浅い方も積極的に演奏されているので、年々盛大な夏祭りになっていくように思います。

ゲスト演奏は九州からの参加で、アルゼンチンタンゴを全身で表現して19年になるというトリオ・ロス・ファンダンゴスの皆さんです。ピアノ(秋元多恵子) ヴァイオリン



(谷本 仰)アコーディオン(いわつなおこ) 1曲目は、「ミロンガ」という曲で、『1940年代、アルゼンチンタンゴのダンスを愛する

人たちが毎夜集まってきて踊る「ミロンガ」という場所があるんですけれども、いまから77年前につくられた曲なのに少しも古くないですね』といった解説をしながら、「思いの届く日」「リベルタンゴ」などを演奏。最後は「軍靴」でした。拍手が鳴りやまなくてアンコールに応じて「ラ・クンパルシータ」を演奏して終了となりました。

ロビーで見かけたスタチュー(人間彫刻)のパフォーマンス。演じていたのは伊藤志保さんとおっしゃる女性の方です。衣装や楽器(アコーディオン)も含め全身石膏のような塗料で化粧されていて、一見等身の置物が置かれているものかと思っていました。そのうちにゆっくり滑るように



動き始めたので、えっロボットだったの! と思っていたら演奏し始めたので良く見ると生の人間でした。

びっくりして話を伺うと、華やかな衣装を着て練り歩いたりすることが好きなので、大道芸とか流しなどもしていて、現在は各種イベントからも声が掛かり、音楽パフォーマンスによる芸術品をめざして活動中だそうです。それにしても驚きでした。(記: 乙津)

※写真は全て主催者より提供頂きました。演奏者の集合写真▼



♪「0歳から楽しめる クラシックコンサート」ぶらり訪問記♪

2018年7月19日（木）開演：10時30分 会場：稲毛音楽室（京成稲毛駅前）



会場は京成稲毛駅より徒歩1分「ヤマギ瀬戸物店」のビルの地下にあります。初めて訪ねた

筆者はうっかり通り過ぎてしまいましたが、ビルの入り口には写真のように「稲毛音楽室」とありました。



さて、タイトルにあるように乳幼児と一緒にコンサートなので、始めにアイスブレイキング的な手拍子で手足を動かす歌を1曲歌ってのオープニングでした。司

会が歌を歌い伴奏はエツィオ・ギバウドさん（アコーディオン）です。（絵：ガブリエル・ゲ）

■演奏者紹介（司会の言葉より）

アコーディオン（エツィオ・ギバウド）さん、ヴァイオリン（池田和世）さんです。（拍手）普段はイタリアで活動されていて、今回の日本ツアーの中で日本では初めてのお子様と一緒にコンサートをやって下さるということで、お越しいただきました。

（7月21日～22日に名古屋で開催される「イタリア・アモーレ・ミオ」のイベントに招かれての来日とのこと）

プログラムは全7曲です。最初の曲は映画

「ピノキオ」より「星に願いを」ゼペット爺さんが丸太で作った操り人形のノピノキオ。とスライドを見ながらの解説は以降の演奏曲すべて同じスタイルで進みます。



前の方の床には畳を置き、幼児が寝転がったり、座ったお母さんの膝の上で過ごせるように工夫されていました。

2曲目は、今の時期に合わせてとヴィヴァルディの四季より「夏」

第一楽章の解説・・・灼けつくこの厳しい季節には、人も家畜も活力を失い、松も燃え上がりそうだ。

“かっこう”が鳴き始めるとそれにつれて、“山鳩”と“ごしきひわ”が歌いだす。

“そよ風”が心地よく吹き渡る。しかし、“北風”が戦いを挑むように突如としておそい、羊飼いは嵐を恐れ自分の不運に涙を流す、と解説。

“かっこう”“山鳩”“ごしきひわ”“そよ風”

“北風”それぞれヴァイオリンでどういう音を出すのかをちょろっと聴かせてから演奏に入ります。

第二楽章での“はえ”の飛ぶ音と“雷鳴”はアコーディオンで、そして第三楽章はいきなりアコーディオンのベローシェイクの“雷鳴”で始まり“稲妻”がヴァイオリンで続きます。そして、ちょっとびっくりや緊張した後は、気分を変えて日本の夏の歌ということで「浜辺の歌」です。お客さんもほっとした様子で子どもと一緒に体を揺らしてしまし

た。

浜辺の歌が終わったところで10分ほど休憩を取りました。ヴァイオリンは時折チューニングしていましたが、日本の夏は蒸し暑く音程がすぐに狂うので何回も調弦し直さなければならないようです。ホールの後ろには麦茶や飲料水が置かれ紙コップにそそぎ自由に飲めるようになっていました。

後半はイタリアの演奏家なので、イタリアの地図を写しながら、アコーディオンをつくらしている工場のある町や演奏者の住んでいる都市を紹介するところから始まります。

そして、空気を送ると金属のリードが震えて鳴る、アコーディオンの仕組みや鍵盤の数、左手ボタンの数、重さなどの説明がありました。また、レジスターを切り替えると音色を変えられることを実際に切り替えて鳴らしてみました。(上の写真)



休憩後、最初の曲は「10 kmの車窓から」というリズムカルな楽しい曲でした。

司会からも説明がありましたが、「しゅっしゅっ！、ぽっぽ！と走る音と、ポーッ！という汽笛の音をアコーディオンのソロ演奏



で表現します。リズムに乗って我が子の背中をトントンと叩くお母さんや、気になるのか、演奏者に近づいていく子もいました。3分ちょっとの演奏でしたが、楽しかったようです。

次はオペラ『トゥーランドット』より「誰も寝てはならぬ」。続いての「フニクリ・フニクラ」は、この曲が始まると客席の話声が

少なくなり、手拍子や手足を動かす子も見られました。やっぱり聴き覚えのある曲なんだなと思いました。

最後は「ルーマニア民族舞曲」を解説を入れながらメドレーで演奏。ヴァイオリン奏者がしゃがみ込み、子どもの耳元で演奏する一幕もあり聴き入っていました。



大きな拍手に応えてのアンコール曲は「さんぽ」でした。手足を動かしたり歌ったりで、元気の良い演奏で幕となりました。



《アコーディオン奏者エツィオ・ギバウドさんへ、ちょこっとインタビュー》

今回3回目の来日ですとおっしゃっていました。使用された楽器はブガリ製でスイッチの切替で左はフリーベースにもなる楽器を使用されていました。乳幼児のいる中で弾くのは、日本では初めてですとおっしゃっていましたが、「イタリアでは演奏していますよ、素晴らしい経験でした」「もちろん弾きにくかったけれども子どもたちのために弾くことが出来て楽しかった」また、「演奏に集中できないのがちょっと大変です、でもなにか得るものがあるんじゃないかと思います」と語っていました。

公式サイト <http://www.ezioghibaudo.com/>

日本の夏は蒸し暑く汗をぬぐいながらでしたが素敵な演奏会でした。(記：乙津)